

第1章 策定の趣旨

1 策定の背景と目的

リニモ沿線地域は、名古屋東部丘陵に位置し、環状・放射線状交通の結節点として尾張と三河を結ぶ重要な地域であるとともに、多数の大学・試験研究機関が立地し、研究・創造の拠点となっているなど、今後の名古屋大都市圏の発展を先導する地域である。また、2005年（平成17年）には愛・地球博が開催され、万博後においても、その理念の継承・成果を発信する地として、重要な役割を担っており、自然環境に恵まれ、環境負荷の低いリニモが整備されたこの地域は、リニモを軸に自然環境と共生した集約型まちづくり、新たなライフスタイルに対応するまちづくりのモデルとしてふさわしい地域である。

こうした中で、沿線の高いポテンシャルを生かし、更なる発展につなげるため、愛知県及び沿線市（瀬戸市、豊田市、日進市、長久手市）は、2009年（平成21年）3月、「リニモ沿線地域づくり構想（以下「構想」という。）」を策定した。

構想には、2025年（平成37年）頃を展望する将来像として「愛・地球博の成果を継承・発展させるまち」、「愛知の新たな飛躍をリードする研究学園地区」、「リニモでつながる『コンパクト』なまち」の3つを掲げ、2015年（平成27年）までの7年間に取り組む主要施策を明示し、自然環境の保全に配慮した計画的な市街地の整備や沿線施設の整備を進めるとともに、公共交通ネットワークの充実や沿線大学の学生・NPO等と協働したまちづくりに取り組んできた。

これまでの取組により、展望した将来像の姿が着実に形になってきているが、今回、この構想における主要施策が取組の目標年次を迎えることから、将来像を展望した地域づくりの新展開に向けて、県と沿線市が取り組むべき指針としての「リニモ沿線地域づくり重点プラン2016-2020」を策定する。

2 取組年次

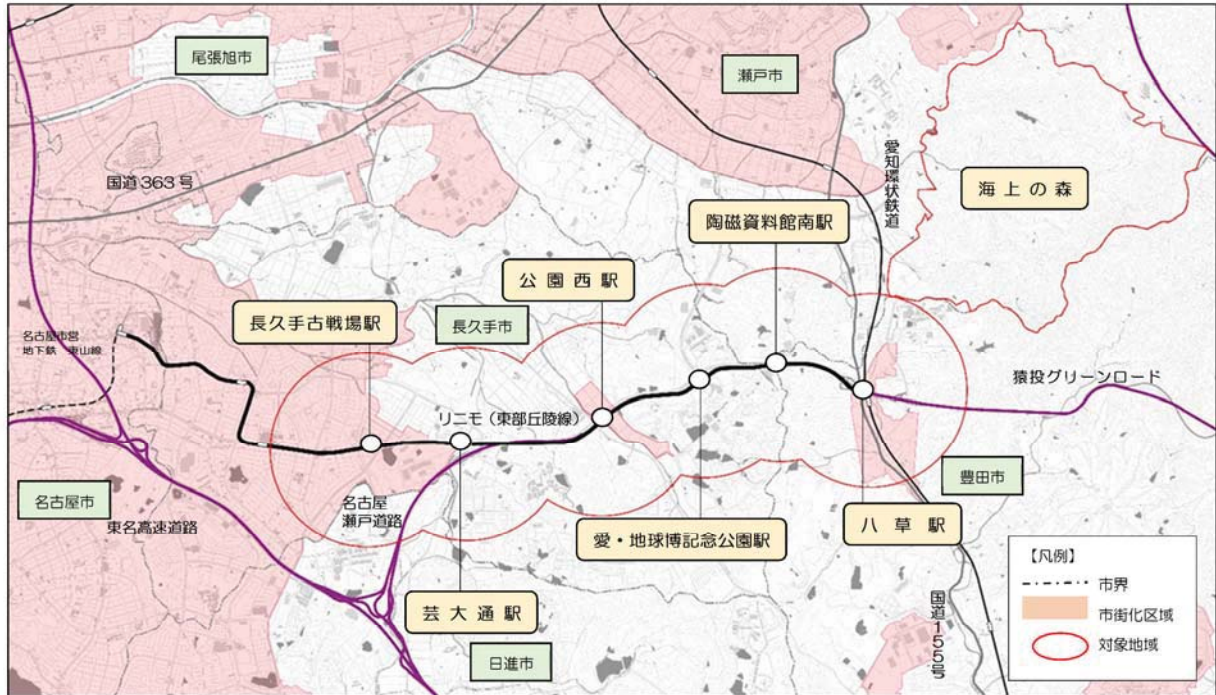
本プランは、2025年（平成37年）頃までの将来像を展望しつつ、2016年（平成28年）から2020年（平成32年）までを取組年次とする。

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
構想	展望する3つの将来像と9つの基本方針 「愛・地球博の成果を継承・発展させるまち」 「愛知の新たな飛躍をリードする研究学園地区」 「リニモでつながる『コンパクト』なまち」																
	14の基本戦略 36の主要施策																
本プラン								5つの重点戦略 15の主要施策									

3 対象地域

地域づくりを計画的に誘導していくことが必要な「長久手古戦場駅」から「八草駅」までの6つの駅周辺（概ね1km圏）及び愛・地球博の理念継承の場である「海上の森」を主な対象地域とする。

< 構想及び本プランの対象地域 >



(参考)

< 2025年（平成37年）頃を展望する将来像 >

◆愛・地球博の成果を継承・発展させるまち

環境共生型の暮らしが根付き、文化・レクリエーション施設等に人々が賑やかに集い、楽しく交流し、新しい地球市民交流・市民活動が生まれるような、万博の理念や成果を更に具体化するまち。

- 基本方針1 環境共生型の暮らしが根付くまちづくり
- 基本方針2 文化・レクリエーション施設等に人々が賑やかに集い、楽しく交流するまちづくり
- 基本方針3 新しい地球市民交流・市民参加活動が生まれるまちづくり
- 基本方針4 環境分野等の先進的取組を通じ、課題に挑戦しつづけるまちづくり

◆愛知の新たな飛躍をリードする研究学園地区

大学や研究機関等の活発な相互連携や研究交流が行われ、研究成果等を世界に向けて積極的に発信していくことで、本地域のみならず愛知県や中部圏全体の成長と新たな飛躍をリードしていく研究学園地区。

- 基本方針5 最先端の科学技術の共同研究や実証実験が行われ、世界に発信するまちづくり
- 基本方針6 地域内外の大学・研究機関の相互連携、研究交流が盛んなまちづくり

◆リニモでつながる「コンパクト」なまち

駅周辺に豊かな自然と調和した特色ある住宅地や都市機能がまとまり、自動車や公共交通、自転車、徒歩等をかしく使い分けるライフスタイルを実現し、環境への負荷を低減した持続可能なまち。また、コンパクトにまとまった特色あるまちがリニモでつながり、沿線全体として他地域にはない大きな魅力が生まれ出されるモデル的なまち。

- 基本方針7 駅ごとに特色ある都市機能が集積したまちづくり
- 基本方針8 駅と背後圏が有機的に連携したまちづくり
- 基本方針9 活発なコミュニティにより持続的に発展するまちづくり